

680
.K2

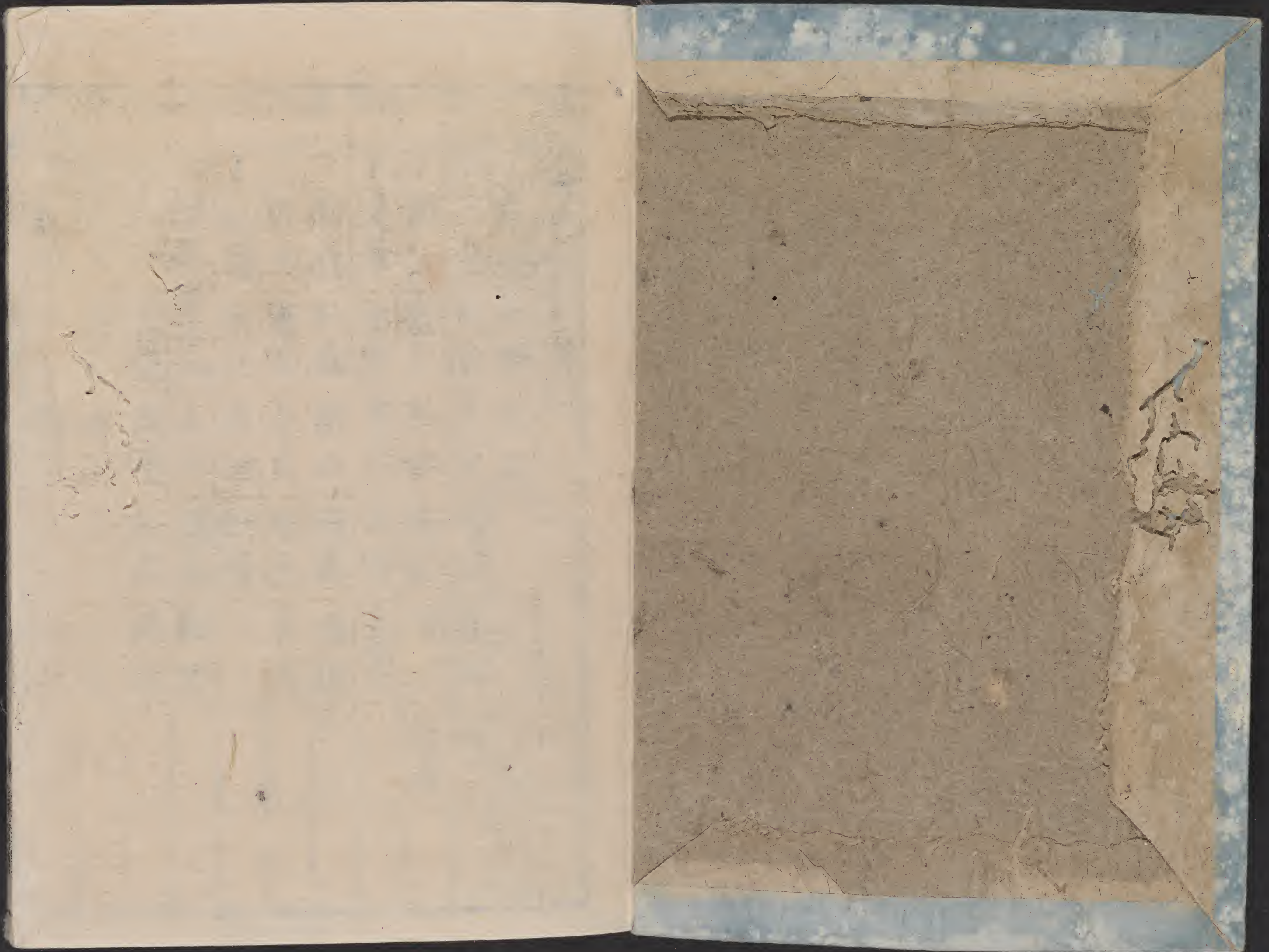


唐長
以來

新刀辨疑

追加

九



新刀辨疑卷之九索引

一丁康繼虎徹吉正

二丁正重兼繼兼定信國吉成

三丁網房盛永兼安廣義康永信高

四丁道孝祐定廣太郎正則大明京

五丁助廣助直廣政廣義廣近

六丁忠綱國助包貞輝包吉道

七丁直道宗次康永助隆

八丁明壽忠吉作兩正弘國廣國路

九丁正俊吉道政國政次正包

十丁信直兼常國良正次俊安

十一丁永國千力國平正房歲長三代

十二丁	正久	久次	昌直						
十三丁	國昌	國秀							
十四丁	氏貞	昌廣	直尹	久真	紹芳				
十五丁	正繁	三秀	國道						
十六丁	兼先	宗利	長良	正武	將應				
十七丁	奇峯	吉盛	盛兄	良明					
十八丁	吉道	直道	秀茂	安倫	正秀	秀國			
十九丁	常永	埋忠 <small>宗茂</small>	國安 <small>無銘</small>	國廣	廣辰				
二十丁	成廣	助包	國武	是一					

新刀辨疑卷之九

長一尺一分

康継ハ武藏越前安所ニ有テ以初代殊ニ上自其家数代連綿寸

角子

長由孫貞里

以南蠻鐵於武列江
越前康継

成重取持内

角子

寛文元年八月七日

貳之册截断

山野加右衛門永久藏

又長二尺四寸

如斯ハ奥里仕斗の銘地淺至て野々大氣又坂食照包々及之
の如く也老後延室の佐よりハ猪沢多る物多し

作長曾孫虎徹入道興里
表劔梵字
ウラ四寸余柄

ヒラヤリ

○上野介源士景

吉正ハ武州佐久沼氏庶徽好志慶常光也久初代の是二
大和也安定此吉正等猪沢多る上自なり

○勢州佐千子子重

千子と切し
初代ありし上自也

一角ム子

○三河國兼継

ウラ ○萬治元年八月日

駿府安西佐貞國

為継貞國共々大休の工壽見寸法安在とハ傳聞の誤也

小肉アリ

○久世定

意定ハ陸奥會津初代おらん國の和泉おらんふあ尺九あり

祖拾代目源信國

ウラ奥州南部於城下作之

祖十代信國ハ筑紫佐田系

平四郎吉政孫新羅次帝を濟國義日人凡或國義信國ハ兄等して南部家の級治と云一類皆上自也其系正ハおらん

本扉面トリ

釘下ラシ

播磨石守櫛吉成八道

大坂初代大和も吉乃門人陸奥國宇多中村佐氏重花丁子又上自也或ハ土佐の吉國吉乃父といふ

角棟

奥列住綱房

ウラ ○ 筒落

津輕のよ也相州經廣門人おらん大躰の佐系利

山ム子

相摸守藤原盛永

盛永ハ甲斐府中佐後孫忠おらんと号江戸も佐氏ハ系凶國の意お下總守金葉河内も英俊相摸守意安ハ大村加卜の門人意安お摸守盛長お摸守盛永も係中の工也

濃列関之住兼安

山ム子

或ハ慶長中關より甲斐府中一歩ありて

○加列住藤原庶義

庶義ハ寛永以前の工とてゆ未の二王の如く上る也

○越前國武蔵大掾藤原康永

康永ハ康継一門ありて上るも

○白老目守藤原信高

尾張初代の懿
也未の青江の
如く是て

○未道孝

京色國の工ありて近頃以て足の上手ハありて

○横生野大掾藤原祐定

備前長船住

以来の上より宗光勝光よふ劣りゆ中心なり成を

○長列住藤原庶義

廣高島八二王の末寛永以と尺八あり上る也

一用公子

但馬國法城寺橋正則

但馬國出石領弘原佐喜重承中のみを備中言橋貞重
を西位あり上り多し

一用公子

雲列住 大明京

大明京ハ七雲園松江住多藤原九島國重也叔代多と尺八
多り如以終ハ何代め承々未銘享保中の大政意ハ治意也と云

一用公子

越前守助廣

万治元年八月日

初代の銘甚く
代無治多承々
地録とも云々
りやる

一用公子

津田近江守助廣

一用公子 双長二尺三寸五分

以南蠻鐵作之
初三〇二〇月
白列〇本

此刀助廣子方々物依く重出之所也

○若狹守源廣政

廣政吳体之... 子... 狹... 助直子... 劣...

○撰列任廣義

廣義大坂津田助廣門人... 或河内守三代目... 中村振馬家

○大和守源廣近

廣近陸奥國中村振馬家

の綴治... 伏見右瀧門尉... 大坂津田... 助廣門人也... 此任地... 荒流小... 源... 白ひ... 津田助廣... の如く... 渡理... 津... 八井上... 和... 多... 國... 欠... 終... 未... 加... 多... 者... 貞... 則... 子... 父... 終... 上... 自... 之... 恨... 久... 八... 以... 任... 世... 稀... 之... 二... 代... 女... 八... 五... 左... 父... 重... 光... と... 云... 以... 任... 未... 見...

○近江守藤原朝臣忠經作

於攝列大坂鍛之

○藤原因助

慶安元年卯月吉日

近江守源河内守國助... 初代の銘... 其... 出...

延後丹波守貞

初代包貞也

小肉

○撰列ある輝包

言々進照包の他のもあるはじに按さるるをその銘なり

○撰列大坂住丹波守直道

「ウラ 慶安四曆二月日南蠻鉄以作之

大坂丹波守初代の銘此刀綴理なり

「角ム子

○丹後丹藤原末直道作

「ウ



延寶貳年五月十日

「角ム子 又長二尺五寸三分

スタレ大出来ツヨシ

○三品丹後守直道

「ウラ ○ 於撰列以南 鑿鐵鋸之

延寶七年二月日

「角ム子

○三品但馬守藤原宗次

寛延二年八月日

是乃三代意光も大小あり

河内大掾源康永

康永大坂河内守初迄あるべし延寶六年河内守より切あり

尾崎源立右馬助隆

ウラ 天明七年二月日

助隆ハ摂津國大坂住人地録細よあり心子正秀ハ四月大坂に
有テ坂倉照包の弱ヨリハシ中を多々の給自際四圍の
治上をいふ勿し地録割きをほむ上より云へりや

角△子

世世吉埋忠明壽弟子

切物明壽作

肥前国忠吉

表牙蓮基妻梵字三蓮臺

ウラ

往身意伸はふ化有し此忠吉明壽弟子の文不信し、
天明年身己三月市安幡河村氏一刀をせに正然無疑今定
政己丑身伊勢國津波武田氏の一刀を摸して惜覽不便す

小肉

大隅掾藤原正弘

地録至て剛く履理帽子足り之

双長一尺二寸七分
幅一寸二分七厘
カサ子二分八厘

國廣

内峯

神田勝久流華後系角形り輝光

如はの國字ありしは其流後多く白ひ流し堀川國
安化の大明末の如し信濃守は身日向て打しよ疑
物也中心の信をむして是るなり

右國廣
中心先



山羽大提藤原國路

山ム子

寶曆十一年八月月

初代國路を成の化ありし

角小肉

城中平に俊

二代目三俊

明壽の如く城州
正弘小似あり

角ム子

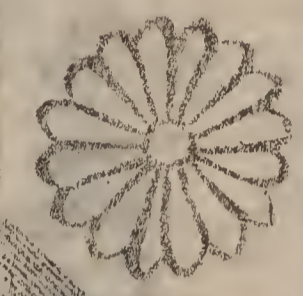
抄波守士口道



三代目地鏡細小丁子系久大和者二代目也其地の如し

角ム子

抄波守士口道



六代目寛政元正存生藤流父之 寶曆十年辰八月三日

一角八子



筑列住改國

改國ハ後系より如はの終る

南都住金房兵衛尉政次

政次ハ地次別く堀川物の如く細慢理を身兼つる也

筑列住信國源二包

上三也

正色ハ享保中江府へ歸りて繼ひしり有地令細小総白ひり

尾陽住清水甚方進信直

「ウラ 天明九年三月吉日

信直ハ尾陽國伯耆守門人地次細小総白ひり上りしり

備松山臣武藤魚常

寛政元年八月日繼

魚常ハ美濃國國守人小色宗公太師未也其時ハ身居て繼加り
法を同志の厚きを感じて微意を示すは言を司ひて一助を
得たりを甚難寸長尾元長の薦して備中國松山の御子
成地次細小総白ひり上りしり國守魚常と計も切也

源氏物語 河内守源永國

「ウラ 貞政の母八月日

伊豫國大洲住人系色江守久乃末傳と云へて一刀を足る

豊後國佐伯住藤原正次

正次ハ高田の人あるべし河漫理又んる也

豊後國日出住後安

前後系系ハ
りれあり後ハ

後の想ありし寛永の化と云ふ上る之は系系之由生し

河内守源永國

於肥州熊本作之

永國ハ勝久曰江戸安定門人と後系系曰於敏系之十歳代寛文ハ
申年と記し梅平安城敏前紀後ハ同人橋法城者ハ前人は水國ハ

豊本住藤原千力

小亀又伯智廣賀と似る

隆赤千國奧太郎國平行年六十九歳造之

寛保三年八月吉也

新編 卷九 水滸

前より月代二刀出たるとその年有之故に惜しむべし

陸奥守藤原三房

三房ハ伊豆守とす末と云
元長元長と云

ウラ安 永四乙未八月日

陸奥守藤原歳長

伊勢國津二代目

陸奥守藤原歳長

初代ウラニ延寶五丁巳洛陽住二村左衛門尉任陸奥守此切

小丸ム子

肥列平戸住三久

ウラ

行年三拾一歳造之
育見 政元 久八

肥列平戸住久次

ウラ 育見 政元 久八

正久久次兄弟ハ肥前國平戸の住人正久地覺傳と正久次ハ地覺多宗と
早稲初ハ今の出紀真了の商人集が故にて義統一紀後の松村
某刀劔を継いで好む但て正久兄弟松村氏寄て鍛煉以地流細
蓋流白ひ者も薩州正良と似たり兄弟同位の上と也

新編

卷九

廿一

水滸

東。肥松村昌直

講武之暇為賜地遠明造之
天。明八年八月

或ハ 講武之暇造之
寬政元年己酉二月

松村昌直其後國藩世祿の士も朝は淳き多し術士の治工も非ず太
平の武恩は浴して天の龍靈を報する志予も同し贈文も云々其
作薩刀を模すもしくあり正清安代木の風ありて上より凡と造るの
藝師も亦求る各実の遠はらも擇ひそのよきもあれと鍛冶の匠も
ありり久しく造る時師と為すは前者をふまへられ古の上への作を

相て是を師として學ぶよきあり備前友成則宗助宗長光栗田口
國友久國吉光國吉國綱相州正宗貞宗江義弘の風こそ慕ひし
長船盛光康光ホ又近世也八坂川國廣津田助廣井上貞改の慶を
傳ても幸と云し古昔の名工は容易よ及ふべしと傳ふる所
もよ時其乃も又近くるん又る亦身も時はせぬし遠くは薩刀
の如きは工小はれられた古の名工も及はれり古遠く古備前
栗田口末相及深木を的として佐と盛光康光國廣助廣貞改より
薩刀の心もあつたりを知らて短と捨長をとめて鍛煉工を積
むる如く古の名工の域も多しあるも今数千百人の鍛工國廣を改
助廣以下の下は屈し正清安代正良元平の上はゆる者少なりハ
志の高うさる上鍛を造る如くも志の向はん治工も
古の名工を目當にしてんや昌直ハ其も亦て刀鍛のり

と問尋しよりのそそ志の涼きをさへし予も又策見の意を述るもの
や志うし國廣真改の粗沸助廣の大龜久ハ正鶴を為よあるに
況や今の薩刀以下は於てかや

延壽國昌作

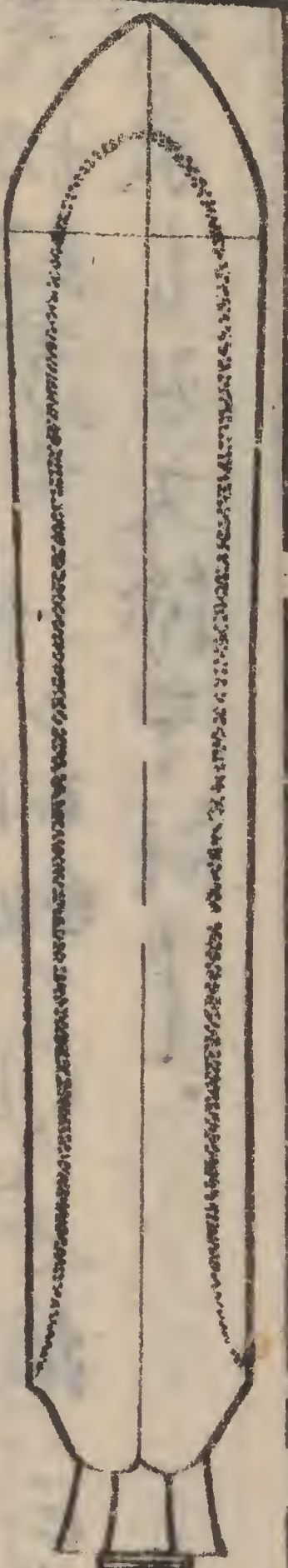
ウラ 天昭六年二月

國昌ハ延壽の末流地流細よ薩刀の如く紙有て上手也

延壽國村末孫國秀作

ウラ 寛政二年八月

國秀ハ末國昌々作小同し



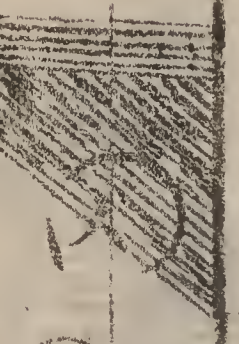
肥後 佐氏貞

大明八年五月吉日

氏貞ハ肥後の鎗工也格好摺多肉重くして上よ也

東肥後藤昌廣

ウラ 寛政三年八月



直

直

直

肥後國 松村昌直 門人此任 師同

松村昌直門人作右同

寛政三年二月

○久真

魚妙男二郎八孫原真鑿刀劔久真と銘寸多く不造也

寛政士子春彦坂紹芳使侍士
兒玉常永鍛之乘間暇自淬刃

小田公子

刃方角

小田公子

此中心サキ

彦坂紹芳使侍士兒玉
常永鍛之乘暇自淬刃

彦坂紹芳士ハ予ハ桐劔の川人也鍛ハ正彦ノ寄ヨリ其
出来も刃文締リ解シ

白川臣手柄山正繁

ウラ

丸公子

寛政五年二月日
お式陽駿代山作之

白川臣手柄山正繁

正繁ハ播磨國姫路の産大和太掾氏重末葉手柄山朝七と号以
按州大坂に住し手柄山氏好むを銘天明申年陸奥國白川の産士長尾
元長吹奏より彼藩に劔工を成故今の銘中心に圖の如く或は字白川
正繁と銘地獄細よ荒銃自ひ有て大龜文繚理いり有物宜
切刃と不器用は予也く彫物も上手也

新刀辨定 卷九

遠江國横須賀住三秀

寛政元年八月日

三秀ハ遠江國横須賀住人少ク西尾家の鍛冶中塚八藏之弟也三秀
門人也其他地鐵研ふる心子之化のしく何れ鐵有て大龜文と好
正秀より不劣上手あり

九公子

土陽住國道

國道ハ土佐の吉國之長子上野大掾國益山只右之長也本村氏
延宝三年本村に改養子久國也上野大掾之任今は國及ハ江戸
正秀門人本村久吉郎と号化ハ西陽と似也

大田守

大田守 佐山城下藤魚先

天明七年八月日

魚先ハ美佐の工數代お陸江川村の師也忠州と号後理上手也

山公子

近江藤宗利

阿波國近藤一守と号正秀門人之又后川分派也と号指亦見也

佐土位品 神原源長良

原中良ト切シ小刀モ同作也

新刀辨定

卷九

廿六

水音舎藏

或中德國良川人氏正秀の人名をも云

山子

○於東都結城正武作之

正武ハ々寛政の級治意常將應ニ同シ

山子ヒクシ

東武源將應

「ウラ」寛政ニ年二月日

將心ハ江戸津田任世ノ鋸鋸ヲ業ト爲モ近年好ムト刀劔ヲ造留志有級治ト云々

「峯内置鉦」正政ニ同

井上高峯

大亀丈真政濤瀾ニ同シ刃長一尺七寸八分半

按同人ナラン

正政ニ年二月日

○豊後國日出住石見守源吉盛

「ウラ」○天明九年二月日

吉盛ハ豊後國日出木下家の級治也天明六年丹波守吉道川人トシ受領寸身持系吉盛壽兵助盛輝有具作未見

小肉ム子

○鍛冶元盛兄

盛兄ハ豊後國日出石見守吉盛嫡子也父の命ニ随寛政二年
未也愚息真贋と共に鍛煉修行寸石見守乞求る故鍛冶元
冬呼吉廉と銘し同五年春盛兄と改む弟鉄之郎盛利有

薩列在良明

「ウラニ天明元年

良明ウ作今の正房小同ーのるべし

角ム子

波守嫡士口道

依於好今井右門三拾八遍折鍛之

寛政五年二月

吉道ハ丹波守子孫孫と号濱辺壽格門人元明より吉格と
銘し寛政二年父丹波守没して後吉道を銘し

小肉ム子

○三品源直道造之

寛政四壬子八月白

直道ハ濱部壽格門人佐多末と号初ハ右格今右道と銘し

○兒也子多秀

○藤原与修

此二人ハ正秀
門人ト云

兩作ウラノ方

○秀阻

○ウラ

水心子當時の銘也
千刀之後

○正秀國

ウノ寛政四年八月日

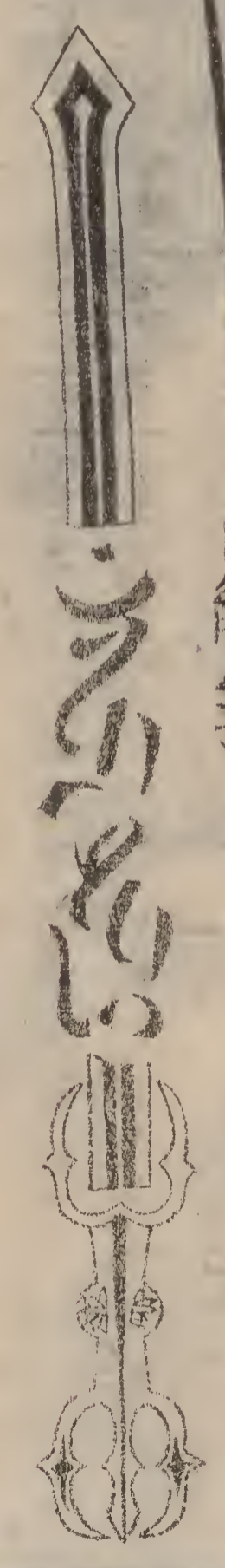
秀國ハ陸奥會津の工大八と号正秀門人也

○兒玉常永作

○兒玉常永作

兒玉常永ハ正秀曰國の産也其彦坂氏の家士正秀門人也

○引物埋也七左



裏 表



埋忠七左衛門正秀の孫元祿寶永正徳鐔の上も
刀釵ハ吉信小同一かゝん歟
朝士煤料也此取藏物也

刀長三尺三寸六分

國安

魚形

此刀無銘 金象眼 若狹國小濱藩中藏

今八角子ニスリ 此鉤ハナキ

此鉤ハウツ 中心先キル

藤原國廣作 於金山海濱

今及長二尺三寸余

新刀銘盡後編於金山海濱地ノ銘セテ國廣有トテ予モ此説ト
聞テ未其物ト見以今辨疑増補ノ條テ一刀試見テ爰テ圖ス

肥後守藤原廣辰

廣辰ハ後集ト常陸守肥後守二人見也中心皆異也上手ト云ハナリ

洛陽城川住成廣造

九ム子國安ノ如シ 金ツヨシ

ウラニ 慶長三年二月日

成廣ハ今一刀試見テ堀川國廣國安ホノ凡モ一門也ナリ上ノ也

野守菅原助包

大和守菅原國武

角ム子ノテ小鉤多ク

物包ニ卷九下ハ國武同人辨疑極メテ又數刀ト云テ土州吉乃吉國ノ
不考見テ了リ國武ト一字銘多ク

武藏大塚

棟肉有及長三尺五寸七分中心長尺七分

藤原石堂是一。

大廿如圖

延寶六年午年一陽月吉日

是一江戸の住と先祖の住前一文字末助長明應中
江州蒲生郡石堂寺に在りて東京江戸大坂紀州等
此武藏大塚實永中より今宣政に至りて連絡す延寶の他は至り上工也

綏靖天皇の御宇天真浦より我國畿治數千萬工其名を

正史に所見^{あり}なり文武天皇 詔制^{あり}有るより以來天國

神息等造る物より其名を必記するも成る生正と好^{あり}を

分別^{あり}のそ下工八其名記す八^{あり}と見元正天皇御宇養老

頃より紫桓武天皇御宇延暦間八^{あり}と園一門神息等多^{あり}乃し

其終の住見えてより利の来世をして上工無とありて醍醐

朱雀村上冷泉圓融花山一条天皇御宇八上工殊ふ多^{あり}源

満仲朝長二刀を試す^{あり}敏利を以て号^{あり}公^{あり}以しと利^{あり}屍

と^{あり}劔試る^{あり}りも^{あり}出^{あり}未^{あり}あり^{あり}里^{あり}
是中古より余の流風廢る^{あり}り^{あり}と^{あり}ハ^{あり}既^{あり}に^{あり}
刑^{あり}し^{あり}終^{あり}て^{あり}再^{あり}刑^{あり}の^{あり}意^{あり}あり^{あり}豈^{あり}可^{あり}不^{あり}思^{あり}哉

後鳥羽土御門頼徳と皇清宇文治建久建保承久の間々
上工の多き世の物なる所也るれり四糸後崎崎後深草龜山
後宇多伏見花園後醍醐後村上天皇清宇祢光と皇清宇
應永の頃より永禄元龜天心の旬ハ鐵治漸衰へて慶長頃より
万治寛文延寶と和貞享元禄と盛中と享和永正徳享
保元文寶曆明和の頃又衰へて殆海内鐵治多き如し又
安永と朕寛政の今ふりんと治工世は多し皆上工は河
谷といふ鐵煉功積つて軒遇突知埴山姫を娶るの域
にれるもの有を俟て今濫は判きん甲乙ハ後の判断

を俟扱又古代の鐵治ハ皆自鹿砥中磨精磨磨まで
為き一よりハ式ふも又へて後鳥羽と皇清宇番鐵治の磨
ハ皆鐵治として古代の如く也北条氏の末足利家の如頃より
鐵治の介は鋳磨工と号するとの出處た祭と又由是ハ
鐵治の中精磨の上工自然と長する所を磨を以て
始を成し夫より出て又鐵治も研磨も為びして目利と
号するを鐵治の名を列し其上下の位を定むるの由來て
又是よつものころして或曰刀劔ハ上下の位は寄る骨の
截るを善と為と也或此補正成の語と云へて其正否ハ未詳此捨僭上驕奢を

禁し戒むるよめて捨へるる云へともて實ハ屍不試也
異るの所(金善)ハ則上作也上化とハ物多く截る故
以て上化と云へ次ハ中也骨も物也相劔の要ハ鈍の善不を
知る不有鐵之記を知るよ利鈍ハ其中に有豈屍の堅軟
骨節の各目冬夏の異る手裏の功拙刀劔の象形試の
教条其紛紜如此と俟て而後相劔俾の益あるん不識
則有疑心可思共

家君常につれ子不教と曰物刀を教せんる古刀
を則て今能く古刀ハ天國宗近と教く
至先備あり粟田口也相新刀ハ助廣茂第一とあり
志をて今に次出物ハ出廣木の教工あり
○門人問曰薩摩の正房お負を告げ及月標と云説を
本より信せば此といふ先生は評をすん家君答曰
此説は廣く告げ及に及る候といふ所ハ何れ
熱の言お教へし○一人曰曰小林國輝教代ありむや
對て曰家系を以て即ち其を浪義不於を語
を以て其末也刀劔不事ハ事進一人而已し
其も杖拳は并急元志津島氏古名孫木の橋流る
と毛刀劔を語又其も則が末に國宗あり

浪華と比ふ不亦在口忠峰松本ハ三代刀鋸を鑄在信
 奉 鈴木ハ小刀杖他類のこころの類ハ圖々少くは
 多し取不亦唯刀鋸不在○曰上代毛打卸也又
 の鋸り甚く強く却て切を研製度乃至多漸く切
 出るより少況も然る事と有者や答曰不の鋸然物
 不始より切ぎ難ハ不し是研を製する者の言
 那類でし ○又問た事し其様も諸物等所打
 又も土摺打して造杖出る事と有者や答曰是病を瘥
 志て廢人ともあるが如し剛漬ハ淨は種よ此物を何
 然もほ製くものあらんや○一人曰は比羅波の友よ
 て書を贈る席徹抄菱生及ハ真の他不て世に多
 しくばしと見ゆるの程むは故不又云と云又宗

鑑治ハ糸人が能見大坂鑑治ハ大坂人が能見江戸
 加治ハ江戸人が能見るを謂者有と云希ハ先生
 の評を待事是亦答む家忠曰希 東武不たりと
 たり日に數刀杖又製する糸少不増れ是故
 は三二をえる是亦少の法抄て業無増くせられ
 を事せまの説や其圖ハ抄の國人が知製と此説ハ
 於事おや○又曰浪華に銘六と云者あり撰り蓮
 して新刀の銘多くは銘六切製新ち家不
 寫しと云ふことしは女者や答曰銘六楊弓河ハ
 と云賣物仕して世に是を銘六と呼打此賣物
 をするに銘六自ら銘六也又次郎年南孫志河
 ハ銘六小共謝之銘六と云女七八人を比ふと云

漱々しく同く斬打しは銘切也其比東河中也亦あ塔夷
川住長吉と云存る物流流もそそ毛俗名いふ其流と云
見木の敷と室町の比より諸國往くしれそといふを
詳ふあ類になんば唯刀細ハ流護の要蓋たる事
を能くしし事撰定する時を存るの敷るくしざ類
神然如しそ類の刀扱成もつて一可否を示
來交ふ於そ事諸弟子候んて曰小子亦亦あかしそ
比に毛るそ事皆先生の力也と今茲追加奉教り
於そ事御し紀ゆを附あ
天明甲辰年暮三有
男 龜田其徳識

新刀辨疑追加終

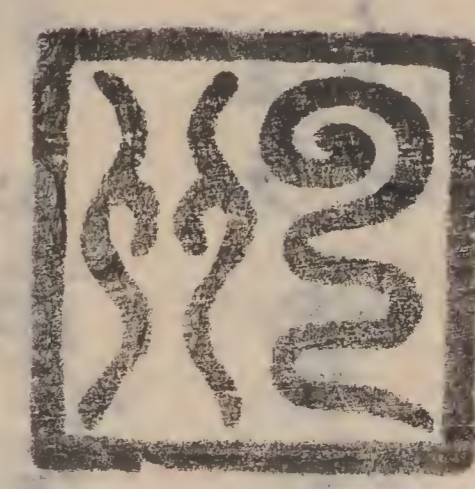
新刀の辨疑後

予生るる年未國家そ法東山と
あひる毛筆そ及は時鬼勉物何
為物あを懐や敬る人可老急恨
そ度筆毛筆毛そあ去刀細そ名
難そ也毛玉毛中能近取そお新筆

新刀の辨疑 後

安永三丁亥年秋教旦

十河長統撰



鍾田出集書



孝經大義頭書

全一冊 本朝鍛冶考

全十二冊

山陽詩鈔

賴先生著

全四冊 古刀銘畫大全

全九冊

山陽遺稿

同

全八冊 新刀辨疑

全九冊

四書集註鈔說

全十冊 同 辨疑畧

小本

全一冊

黿頭四書集註

文久補刻

全十冊 同 銘畫大全

彩色入

全一冊

和漢儒書經書神書佛書醫書歌書誹書連哥狂歌隨筆雜書其外繪本類數多法帖唐刻和刻數品御詔御藏板彫刻物并製本仕立入念出來總而格別下直奉仕上候且御拂本成丈直段宜頂戴仕

大坂書林

心齋橋通南久太郎町

河内屋徳兵衛板

大政書林

所內氣為之林
全一冊

八書山集而於陽下直乘於上即且四林本為少並且也則...

此書... 全一冊

此書... 全一冊

此書... 全一冊

此書... 全一冊

此書... 全一冊

